



台湾および中国大陸における ミカンコミバエ種群の発生の現状

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 **まつ** **むら** **まさ** **や**
九州沖縄農業研究センター生産環境研究領域 **松** **村** **正** **哉**

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 **おお** **つか** **あきら**
農業技術革新工学研究センター高度作業支援システム研究領域 **大** **塚** **彰**

台湾行政院農業委員会農業試験所応用動物組 **ふあん** **ゆう** **びん**
黄 **毓** **斌**

はじめに

ミカンコミバエ *Bactrocera dorsalis* (図-1) は、アジアの熱帯～亜熱帯地域を中心に生息し、かんきつ類をはじめ、マンゴーやグアバ等の多くの熱帯性の果樹類や果菜類の果実を加害する害虫である。分類学的には近縁種が複数含まれているため、ミカンコミバエ種群と呼ばれているが (DREW and HANCOCK, 1994)、本稿ではこれらの種群を含めて、以下、ミカンコミバエと呼ぶ。

ミカンコミバエは 1986 年に日本全域から根絶されたが、次章で述べるように、その後沖縄地域を中心にトラップへの誘殺が繰り返されている。2015 年以降は、沖縄県のみならず鹿児島県においても誘殺が確認され、とりわけ 2015 年には奄美大島南部を中心に寄生果実が確認され、誘引剤を含んだ誘殺板の設置や散布、寄主植物の移動制限やポンカンなど果実の廃棄などの緊急防除対策が取られた。



図-1 ミカンコミバエの成虫

Recent Occurrence of the *Bactrocera dorsalis* Complex in Taiwan and Mainland China. By Masaya MATSUMURA, Akira OTUKA and Yu-Bin HUANG

(キーワード：ミカンコミバエ，飛来源，発生動態，地球温暖化)

沖縄県や鹿児島県で誘殺されたミカンコミバエがイネウンカ類と同様に気流によって運ばれたと想定し、その飛来源を推定する試みが行われている (OTUKA et al., 2016; 大塚ら, 2018)。その詳細についても次章で紹介するが、飛来源としては台湾東南部や台湾西北部が推定されている。一方、藤崎 (2016) は、近年、ミカンコミバエの誘殺の頻度が増加している原因として、地球温暖化に伴うミカンコミバエの発生地拡大の可能性を指摘している。藤崎 (2016) は、WAN et al. (2011) および SHI et al. (2012) をもとに、中国大陸についても日本へのミカンコミバエの飛来源としての可能性を今後検討すべきことを指摘している。

ミカンコミバエの誘殺の頻度の増加には、発生地域の拡大とともに、発生地域における発生密度や発生動態の変化も関係すると考えられるが、発生地域におけるミカンコミバエの近年の発生実態についての詳細な情報は少ない。そこで本稿では、日本へのミカンコミバエの飛来源として推定される地域のうち、台湾および中国大陸における近年の発生状況について、台湾の発生データと台湾および中国大陸の文献情報をもとに解説する。なお、公表されている多くのデータは、メチルオイゲノールを誘引源とするトラップに誘殺された雄成虫個体数の変動データである。ミカンコミバエの被害率や雌成虫の個体数データを得ることが大変難しいため、本稿では雄成虫誘殺個体数で個体群の変動を代表させている。

本文に先立ち、文献入手にあたってお世話になった、中国河南省農業科学院の封洪強博士に厚くお礼申し上げます。また、原稿について有益なコメントをいただいた守屋成一博士に厚くお礼申し上げます。

I 日本における近年のミカンコミバエの誘殺と発生の状況

ミカンコミバエは日本では沖縄本島で 1919 年に初めて確認されて以来、沖縄県および鹿児島県の奄美群島を